
イノセンス

東野咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イノセンス

【Nコード】

N4069M

【作者名】

東野咲希

【あらすじ】

憎しみと交差する愛しさに苛立つ探偵。

罪の重さはいっそう増し、それでもふとした瞬間の幸せを手放せずにいる科学者。

今も意識を浮かせて眠りにつくangels。

それぞれの鎖は、今も消えないまま――

prologue (前書き)

シリアス中学生コ哀。

Prologue

あいつを憎んでいる。

そうやってしまえば、自分は無罪になれるような気分には墜ちていた。

あいつさえいなければこんな姿になることも、蘭がああなること
だっ

てなかった。

あいつは犯罪者なのだと、ここにいてはいけない存在なのだと。

俺は、被害者なのだと。

必死に言い聞かせて植え込ませて、そして彼女を傷つけて苦しめることも厭わないと、決めた。

そこまで非情になれる奴だなんて思っちゃいなかった。

少しくらいは、騎士道精神が疼くだろうなんて予想していたこと。それを押さえつける術だってあった。

でも、そんなのは無駄なだけ。

それは最近知ったこと。

prologue (後書き)

とりあえず、プロローグだけうpしてみました。

ちゃんと最後までシリアスに突っ走れるかなと不安ですが、なんとか頑張ってみます。

1 (前書き)

コナン視点

感情のない機械音が鳴り響く、どこまでも白い病室。

見慣れているはずのところでも、来る度にいつも知らない空間のような感覚に襲われる。

まだ、こうして病室に通い詰める現実を、信じ切れていないのか
もしれない。

静かにベッド横のサイドテーブルに持ってきた花を置いて、取り
替えていない花瓶の水の中に突っ込む。

ちら、と小さな花びらがもげて墜ちた。

下には、今まで持ってきた花の欠片が枯れて身を寄せ合っている。
そこだけ、清潔な病室に外のモノが入り込んでいるような気さえ

する。

どっかのドラマでみるような、広くて白い、でもただそれだけな部屋。

そのままそこにあった椅子を引き出し、ゆっくり腰を下ろす。

目の前には、さらりと流れ落ちる黒髪が横たわって呼吸をくりかえし続けていた。

今にも起き出して、偽名なまえを呼んでくれそうな気がするのに、けして目を開けない。

その髪にそつと手を伸ばした。

「蘭・・・」

引っかかりがなくて、まっすぐに混じりけのない黒髪。

髪とはその人の性格を表すことがある、なんてどっかで訊いたこ

とがある。

あながち嘘ではないのかもしれない。

カーテンが風をはらみふわふわと浮かぶ。

点滴が刺さるしなやかな筋肉がついた腕が痛々しくて、目が細く
なった。

血なんて見慣れているのに、近い人になるとこうも哀しいのは何
故なのだろう。

（そもそも、あの日以来、血なんて見る機会はないから鈍ってる
だけかも）

なんの表情が混じったため息かなんて分からない。

肺が重く空気を送り返した。

もういちど、吐息で名前を囁いても、目の前にある現実は何もかわりはしなかった。

アンビバレンスという言葉を出す。

憎しみと愛情を同時に相手に併せ持つことを指すらしい。

憎しみと愛情は対ではないから、共存するのだって可能。

灰原に向けたものも、たぶんそうなのだと思う。

認めて受け入れたとみせかけて、それもまた見栄張って。

月も出ない濁った夜闇に浮かぶ白い肌に、紅い印を刻んでその軀を解放した。

なんの反応もせず、ただ白いシーツに痕を残しすぎた。

は、と落ち着いた息を吐き出せば、彼女の肌がしめる。

「・・・なんか言えば？」

言葉を投げて、どこかに吸い込まれるだけで跳ね返ってこない。

「なにも、いうことないもの」

機械が言ってるような清んだ声。

反応を求めて帰ってきた、それで満足すればいいはずなのに。

なにも帰ってこないより、すり切るような痛さが増す。

その痛さが、此処は居るべき所ではない、と言いつ聞かせる。

わかつてる、それくらい。

でもその痛さが、むしろ快感なんだ。

「そうだけど、なんか」

「そんなの知らないわ。早く出て行ってよ、気が済んだでしょう」

「ん、」

布団を手繰り寄せて背中を向けた灰原をみつめた。

昔もこんなこと言ってた。

けど、こんなに冷たいものじゃなかった気がする。

「・・・またな」

ベッドからすり抜けて、床におちた服を羽織って、だるい背筋を伸ばす気力もなく。

ドアノブに手をかけて、振り向いても。

灰原はそのままだった。

外は生ぬるい空気が夜空を緩めていた。

道には生きた気配もせず、夏の夜とはこんなに不気味なものだったろうか。

家の塀にもたれかかって、掴んできたミネラルウォーターをぐいっと喉に入れた。

見上げれば、ぴかぴかと人工の光を発しながら移動する飛行機。

それは「あの日」の夜とおなじものを思い出させて、どこかが歪んだ。

もう五年経ってるっていうのに。

そんな一ケタの年数など、刻みつけた記憶はすり減らないものらしい。

すべてが色を変える。

そんな日が、誰にだって一度はある。

忘れもしない。

俺の、18回目の誕生日。

1 (後書き)

やっと一話完成です。シリアス大変だあ（――）
サブタイトルの付け方をどうしようかと悩みましたがしんぷるいず
べすにとってことで。

ここまで読んでくださってありがとうございました。

それは、俺がガキの姿になってから初めて迎える誕生日だった。

今思えば、工藤新一とおなじ日に生まれたどこの馬の骨かも分からないガキなんて、疑わないほうがおかしいだろうけど。

博士の家で誕生日パーティをしようと言ったのは蘭だった。

探偵団の奴らや警視庁の人たちまでも呼んで、盛大にやろうと。

当然そんなことやられても、と断りを入れようとした俺を「愛しの彼女がせっかく言ってるんだから」と皮肉ともなんともとれるような言葉で制した灰原ももちろんいた。

『コナン君、美味しいケーキつくるから楽しみにしててね』

ちよっとはにかみながら言った蘭は、この世界のなによりも可愛

いんじゃないかとさえ思えた。

俺は子どもらしくうなずいて、笑い合った。

子どものふりするのも、楽しくなってきた、この頃は。

なんでだかいつものように俺は蘭に金魚のフンのようにくっついていくのを忘れた。

俺は博士の家で待っていた。

階段の途中にある小さな窓に体をもたせかけて。

窓に張り付いた若葉越しの道路に、赤茶の髪が揺れていたのだ。

それが気になったからかもしれない。

灰原はまた何かつまらないことでも考えているのだろうか。

小さな背中もさびしくみえる。

くだらねえことで自分追い詰めて、ひとりで背負ってるんじゃないか。

もっと周りの奴に、やわらかいところ見せてもいいのに。

俺も、もっと頼りにしてくれていいのに。

さらけだすことに慣れていない。

実は脆い奴だ。

そのうしろすがたをただみつめた。

目を切りはなしたらモザイクのようにぼやけてしまいそうだった。

今思えば、みつめてはいけなかったんだ。

どこか拒否するように向ける背中を無視してまで。

一瞬の出来事だった。

向かいから灰原に手をふりながら蘭は道路を横断する。

灰原の方がびくりとふるえる。蘭は笑顔で。

そのとき横からふいに走っていた車の頭が蘭と、灰原をかるいものか何かのように舞わせた。

どごん、と鈍い音がついてまわり、地面にたたきつけられたふたりからじわじわ赤いモノが染みだしてきて。

俺はよくわからなかった。

そばに居た近所の人になにか叫びながら家に駆け戻り、そこからの記憶が薄い。

かすみがかった曖昧さではなく、そのときみた景色がモノクロで、会話だってなにも思い出せない。

でもただ、新出先生が惜しむようにいった言葉だけはおぼえている。

『あの女の子は、蘭さんを助けるために飛び出たんだ。だけど、それが蘭さんを』

「っ・・・」

思い出すのも軋むように痛くて。

いつのまにか水滴がたれとぼれる空のペットボトルを握りつぶしていた。

いくら力を込めようとどうなるわけでもないことは分かっているのに。

助けようとした。だけど、それが逆に徒となり、灰原は助かって蘭は意識不明のまま。

ミステリーじゃどこにでもあるし、俺がそういう事件をみたことも少なくない。

だけどぬぐい去れないくもりが、心を押さえ込んで歪ませる。

それからずっとずっと、立ちすくみながら生きてきた。

まわりの奴がどんどん体も心も大きくなる中で、でも俺は戻らなかった。

戻れなかった。

解毒剤はできた。

目の下にくまをつくりながら、学校も休み休み、倒れて病院へ運ばれていくこともあったほどに彼女の体を弱らせたその薬。

それが小学二年生のとき。

俺はもう気力もなくて、たいして喜びもしなくて、それでも飲んだ。灰原にそこまで解毒剤を急がせたのは俺だ。

だけど今まで一時的に戻った耐性が原因でもう戻れなかった。

『もう戻れないと考えてもらっている。でも、解毒剤の研究は続ける。かならずあなたを戻すわ』

強く、でも声は細くて。

いろんな言葉がうずまいているのに何も言えなかった。

「回想おわり」

ふっきるようにつぶやいてみて、彼女のいるはずの家に戻った。

暗い廊下に歩く足のついた先、ドアをあけてみる。

灰原はいなかった。

2 (後書き)

急いで書きました。低クオリティです。
ここまで読んでくださってありがとうございます。

ドアを開けて帰ってきたのはわかっていた。

私は身を潜めた。息さえもとめるように。

なぜこんなところでうずくまっているかは分からない。

怖いからかもしれない。

ずっと凍りついた感覚が、腰の辺りを浸食する。

「灰原？」

窓越しでくぐもった声がきこえる。

「服、おいたまま帰ったのかあいつ、」

そんなような言葉が聞こえて、ブラウスを着るのを忘れていたのを思い出した。今着ているのは黒いキャミソールだけで。

でも暑いから、それはおいたままでいい。どうせまた来るから。

「いえば送っていったのに・・・」

私の服片手に、ドアを開けて階段をくだっていったのを確かめて窓を覗く。

何なのよ。

無理矢理抱いたかと思えば触れる指先は羽のようで。

帰ってくれば私を捜す。

憎んでいるんでしょう？ 私を。

今を作ったすべての根源の私を、憎んでるっていったじゃない。
なのに、どうして優しいの。

こらした視線の先に捕らえた空間には、動くものはいなかった。
ほっとして、顔を戻して家並みにはさまった夜空をみあげる。
ぴかぴかと空を移動していく飛行機。　　なんだかひどく不似合いだ。

こんな、満月がひかる漆黒の空にいちばん似合う人といえば。

いろいろ考えることが多すぎて、考えなくてもいいことを考える。
そういうときにかぎって、考えなくてもいいことでなかなかないこと
と思いついて、それでまた逃げる。

矛盾した繰り返し。

真夜中の静けさのなか、ふいになにかの音が羽ばたいた気がした。

その音に聞き覚えがあり、私はそれを視界に捕らえる。

真っ白な翼を右へ左へ羽翼させ、顔にあるモノクルが月光でひと
すじ光ったかと思うと、目の前の手すりにふわりと降り立った。

その様子はほんとうの鳥だ。自分の翼をほこらしげに、自由に空をすべる、鳥。

「そんな格好でどうされましたか、お嬢さん」

「・・・ずいぶんと優美に飛ぶのね、あなたは」

「それは光栄です」

おもむろにその白い手は私の手を取ろうとしたが、さりげなくこちらも手を後ろへ回した。

それに気づいてか気づかないのか、手すりからすべりおりた。

「寒くはないですか」

「寒くないわ。夏だもの。ちょうどいいくらい」

「でもあなたのような方がこんなところでうずくまれているのは、私としても気が気でいられなくこうして降り立ったままです」

「・・・もうキッドでいなくていいから。黒羽快斗さん」

立ち上がって、長いスカートを風にはらませながら「怪盗キッド」にほほえみかけた。

ぎよつとした顔でこちらを凝視すると、ふいに力を抜きその横顔をみせた。

「・・・哀ちゃんはどれくらい俺のこと知ってるのかね」

「表面上だけなら、まあまあ」

「そっか。でも俺は、表面上だけじゃないよ、哀ちゃんについてしってること」

「あらそう。で？ここに来た理由は？」

このままだったらと話していたら満月が沈んでしまう。

彼はからからと笑った。キッドには似合わない自然な笑顔だ。

それが、遠い記憶に滲んだブレザーの背姿とだぶって、視界が歪んだ。

「せっかちだなあ、哀ちゃんは。まあ、ずっと会ってなかったでしよ組織を潰してから。こんなに綺麗になってびっくりしたけど」

「小さくなって・・・の間違いじゃないの？」

やわく切り返す。

「あなたは全然変わってないわね。あれからもう、何年もたってるのに……」

彼が怪盗キッドをやっていたのは、父を殺した組織を突き止めるためだったそうだ。

そしてその組織は、私がかつて所属していた組織がはりめぐらせた根の一部だった。

組織が追い詰まるそのとき、この人は最後の最後で中核部の建物に花火を投げて去っていったのだ。

焼け朽ちていきながら、あざやかな光を空に向かって放っていたそれは、なんだか胸のどこかをきしませた。

懐かしさの進化版。

「何年もって言っても、哀ちゃんたちの体からしたら一日一日が変化する連続だけど、成人するとあんまり関係なくなるんだよね、五年くらいは」

「そうね」

ひらり、と風にのった白いマントが体にからまる。

そのマントを抱きしめた。

「・・・哀ちゃん」

「・・・あなたのマントって、無駄にすべらかね」

撫でていると、無性に何かが恋しくなった。

「そりゃあ、天下の怪盗キッド様のだから」

「怪盗、やめたくせに」

まあそうなんだけど今日は特別、と笑った。

「様子見にきたんだけど。やっぱりあいつ、ぐれちゃってるのか」

マントに顔を埋めた。

優しい匂いがする。

工藤君と同じだ。

「哀ちゃんを傷つけてないかなって。だけど、．．．傷ついちゃってる？」

顔を覗き込む。

「傷ついてなんかないわ。でも、痛い」

「なら、傷ついてるんだよ」

「違うわ」

月夜の晩、こんなに大きな満月が出ることはあまりない。

妖しく、艶やかに、夜には身を隠す情熱の炎の星から受ける光で輝く。

けしてひとりでは輝けないとわかっていても。

「あなたをみると、私が奪った、・・・工藤君にみえてくるから、嫌なの」

「自分の過去は、みたくない？」

静かな問いかけ。

過去、という単語を何回ループさせ続けただろう。

もう飽きるほどに。それこそ、世界のひとの過去すべてを覆い尽

くしてしまうように。

「過去なんて．．．毎日向かい合って話しかけてるわ。でも何も反応はないの」

「そりゃあね。しゃべらないもん」

「ときどき、よそ見をして未来を^{これから}みると、うるさいくらいにしゃべりだす。私は口を閉ざすわ」

どこかの小説のモノローグ、下地のようにくどい言い回しをしてみる。

この人相手じゃないと、そんな夢見がちなことはできないだろう。

「これからってものが、どれだけ語彙をもってるかってことだよ
ね」

「語彙なんていらない。必要な言葉だけもっていればいい。くどい言い回しなんて、濁すだけだわ」

吐き捨てれば、くすりと微笑される。

「あいつも、ちゃんと言葉でいわねえとなあ．．．」

「あなたのいうあいっつってどこにいる？今」

あなた、みつかったらお縄よ。

「今はたぶん、哀ちゃんのブラウス、洗濯機にかけて手持ちぶさたになってるんじゃない？」

「ああ、」

たぶんそうね、笑ってみる。

ひとりよがりに。

少し沈黙が堕とされ、白くひかる風に体をあずける。

「あいつ、そういうところは変わってないもんね」

「そういうところ？」

「ばかみてえに素直なのと、アホみたいに高潔な感じが」

「、」

頭がぐらりとする。

「ぐれてても、あいつはあいつだから。かわるところとかわからないところがある」

「そう、ね」

いっぱいっぱいの相づちを打つ。

「ブラウスなんて洗わなくていいのに。憎んでるんなら、そんなこと普通しないのに」

流したつもりだけれど、たぶん見抜かれているのだろう。

「哀ちゃん」

「え？」

すげえ辛そうな顔してるよ、と頬を大きな手で包まれた。

暖かくてしょうがない。 なにかにすがりたい気持ち。

握りしめていた白いマントをぎゅっと引っ張った。

「さらっていったよ」

「ん？」

「あなた、怪盗なんでしょう？ 私も盗んでいったよ」

「何から盗むの？ 哀ちゃんは誰のモノでもないから盗みようが、

」

「工藤君からよ」

目を丸くする彼を、まっすぐみつめた。

「どうしても離れられない。いくらあっちが憎んでるつもりでも、軽視してるつもりでも、私は、大切なの」

工藤君を、愛してる。

かんたんにまとめていってしまえばそういうことで。

そこに恥じらいなんてものは何もない。

目の前の白き怪盗さんは、微笑む。

どこか似ていて、でも違う。

違うから、こうして縋って醜い姿をみせることができる。

ひとりよがり、またそれが頭をよぎる。

気づけば、頭をするすると撫でていく手があった。

それがあるはずのなかった子供の時の願望がかたちになっている
ように。

「あいにく、俺は宝石しか盗めねえんだ」

色あせた声が、うまく頭にすべりこんでこなくなる。

私、眠いんだ、と気づいたときにはもう、意識は闇夜にとけ込んでいた。

4 (後書き)

だらだらになってしまったような。次からコナン君視点になると思
います。

ここまで読んでくださってありがとうございました。

「ねえ、哀ちゃん！」

ふと窓の外に投じていた瞳に投げられた黄色い声に、私はとろとろとしていた意識をすこし固めた。

ゆっくりそちらにむくと、無垢な笑顔が目の前でにこにこしていた。

「きょう、一緒に勉強しない？」

「勉強？」

「ほら、もうすぐ期末だし・・・宿題もあるし、歩美だけじゃどうしていいかわからないんだあ」

まだなかなかテストになれていないというか、と口ごもる彼女に、ほほえみかける。

「宿題は私のを写すだけでしょ？ それにろくに勉強しないし」

だいたいこういうときもそうそうに済ませておいた宿題をあつというまに私のか円谷君のものをばれない程度に写し終え、ノートを広げるはいいもののだらだと寝転がりのんびんだらりと話を割って面積をひろげ、結局外は暗くなりお開き、となるのは目に見えている。

「そーだけとお・・・ちょっと中間がやばかったから今回まじめにやらないとケータイ取り上げちゃうって！」

「それはけっこうな節約になるわね」

「哀ちゃんとメールとか電話とかしたいんだもん」

「毎日会ってるじゃないの」

「学校だけじゃ足りない！」

よく恥ずかしげもなくこういうことを言えるものだ、と毎回感心してしまう。

年相応ではこれが普通なのだろうけれど。

いいかげん、名前をひとつ捨てたのだから年相応になってみたい気もするけれど、それはゆるされない。

ふと歩美の背後に伸びた影がかかり、ずっと姿をあらわしたのは昨日の夜を共に過ごしたひとだった。

「ふうん、」

おもしろそうに、でもどこか軽い碧瞳をこちらにむける。

ふる、と体が震えた。

恐怖からでも嫌悪からでもなく、でもそれはなんなのだろう。

「コナン君」

「今日メシつくるのめんどいから、博士のうちに食おうかと思つて。教えてやろっか？」

いつも食べてるじゃない、という言葉は飲み込んだ。

「コナン君、部活でしょ？サボっちゃだめだよ、エースでしょっ」

「やりたくねえときにはやんねえってのが俺の主義」

嫌なときにやっても、楽しくねえしいいプレーだってできねえだろ？

「もう、コナン君ったら！」

たのしそうに笑い合うふたり。

嘘でしょう。

サッカーをしていれば、工藤新一の再来と嬌声をあびせられるからだと。

それが、嫌だからだと。

あなた、そういつてたでしょう？

「じゃあ、あとで哀ちゃんちにいくね！歩美掃除当番だから」

「ええ、」

手を振って廊下に消えていった歩美を見送って、かばんを横のひっかけからとり、立ち上がる。

教室の中は、彼と私だけ。

外から舞い込んでくる音は、なおさらふたりだということを強めるように。

ふと、工藤君の手が肩にかかった。

「なに？」

「なにするかぐらい、わかるだろう？」

気付けば鼻がつきあうくらいに距離は狭まり、瞳は焦点があわな
い。

「早く帰って、いろいろしなくちゃいけないの。あなたの相手は
あとで」

「いま、キスしたい」

「だから、洗濯物とかいろいろあ、んうっ」

ぐっとなつかまれたところを引き寄せられ、唇がぶつかる。

抵抗しようとしてもがいている間にあいた唇の間から舌が入り込
み、逃げた舌を吸い取る。

意味のない嗚咽のような吐息がからまり、腰に力が入らなくなつて彼の体にもたれかかった。

そのままずっと銀色の糸をつなぎながら離れた唇を舐めながら、工藤君がにやりとほほえんだ。

まるで卑しいように。

まるで、やさしいように。

それがなんだかどけこめないような矛盾を感じさせ、触れているのが怖くなる。

机にぶつかってずれこむのも気付かずに、私は逃げ出した。

ずっとうしろからみつめられていたことに気付いたのは、校舎を出てからだった。

「ねえ、哀ちゃん」

「なに？」

思った通り宿題もそこそこにベッドに転がった彼女の目がこちらにむく。

持ってきたおせんべいとお茶を左手に持ち替え、後ろ手にドアを閉めた。

「コナン君と、なにかあったり、したの？」

「・・・なんでそう思うの？」

ゆっくりと、やわらかく母親の語り口になる。

それには慣れたことなのか、じっとみつめる瞳。

「中学に入ってから、ずっとおかしいじゃない。どっかがずれてるみたいなんだもん」

「ずれている、ねえ」

テーブルにありついてふうふうとお茶を吐息で冷ます彼女を横目に私もおせんべいをかじる。

「いままでとは何かが違うから、そう思うだけかもしれない。だけれどさ、どうなんだろう」

「別にどうもしてないわ。いままでどおりなわけじゃないけどね。だって思春期でしょ？」

「えー、そーゆーの哀ちゃんたちに関係あるのかなあ」

笑った。

「だってね、昔、哀ちゃんたちが転校してきて、友達になって、普通じゃないんだなあってことくらい歩美でもわかるもん。ずれたりなんか、しないって・・・」

「歩美ちゃん、わたしたちすべてが完璧なわけじゃないのよ。人間だもの」

「人間だもの、それ国語で習ったね、」

「相田みつを？」

「そう」

話をそらされているのか。

そらしているのか。

言葉のあいだに隠れているものを探すようなものになったのか。

（五年って、やっぱり相当なものよ、黒羽君）

5 (後書き)

おわりかたが微妙かしらん？ 更新です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

「満月、ですの」

「良く晴れてるわ」

窓でカーテンのはらめきのように揺れていた白い光は、振り返って微笑んだ。

「あなた、暇なの？ 満月だってかこつけては」

「俺プータローだからさ、ジイちゃんと自分が食っていけるくらい稼いどけばいいの。自由なの。ふりい」

「何を言ってるんだか」

窓の外は涼しい。

このごろの夜なんて、カーディガンを羽織らないと肌寒いくらいだ。

あのべたついた暑さは知らないかのように去っていった。

それでもとくに変わらない服装で手すりに腰掛けている彼を突き落としてやろうかと思った。

その翼が羽ばたいていくのでしようけれど。

「もう肉まん売ってる季節だよ？おでんなんかもあるし花火もだんだん姿を消しつつ」

「あなたの季節の基準はコンビニなの？」

「まあね♪」

「肉まんかあ」

歩美に誘われて帰りがけ食べたけれど、ほくほく暖かった。

秋初めでは少し熱いくらい。

結構おいしかった。

つるつると広がる藍色の夜のなかに、ぽかりと穴が開いたように月があった。

空は、どこまでも広がるんじゃない。

限りがある。

それは、抜け出せないスパイラル。

「ねえ、」

「ん？」

「五年って、やっぱり長いわ」

「長い？」

「ええ」

「だからいったでしょ。哀ちゃんたち、まだ未成年なんだから」

モノクルが反射して表情はみえないけれど、口角が上がっている。

渴いた笑い。

「体はね」

「心と体はいつでも比例してくもんだよ」

わかりきったようなこと言っ

私と工藤君だけの運命。

わかるはずもない。

そんな優越感？

解毒剤はいまも作り続けている。

もういまさらできても、戻れるかどうかわからない。戻れない確率の方が高い。

それでも。

彼女が、意識の狭間で永い思い人に出会えることができたら。

そして目覚めれば。

せめてもの、罪滅ぼしかもしれない。

それに、解毒剤をつくっていれば、ここにいられるからということもある。

(最低だわ)

そんなこととうにわかっているけれど。

薬がなければ、彼はあのまま、蘭さんと平和な空間をつくりあげて、淡い初恋を円満にみのらせていたでしょうに。

事件を追いかけることも、なにかもが、うまく。

むしろ私がいなければよかった？

背筋が凍った。

怖い。

考えたくない。

すべて辻褄があってしまふ。

ハッピーエンドになってしまふ。

それが怖い。

人間ってものは、自分の存在が否定されるのをいちばん嫌う。

自分のことがいちばん大切に、できている。

『それが、嫌なんだよ』

出逢ったところ、加害者が泣きながら口元に笑みを浮かべているのを見て工藤君はそういつていた。

いかにも正義の味方らしい言葉だわ。

そう思った。

結局私もおなじじゃない？

「哀ちゃん、ちょっと」

「ん？」

くいつとあごが上げられ、うしろめりになる体を慌てて立て直すと、唇がなにかにさっとなぞられる。

びっくりして目を見開くと、小さい棒のようなものをもって微笑む怪盗さんの笑顔が視覚につたわる。

「・・・リップ？」

「ちっちっち。それは違うねお嬢さん。グロスと言うのだよ」

よく見れば棒ではなくて、中にきらきらしたものが入っているチューブだった。

クラスメイトの女の子たちがポーチに入れているようなもの。

「こういうのやらないの？唇かさつくよ」

「薬用の使ってるから」

「もー、花も恥じらう乙女なんだから唇くらいおしゃれしなよ」

「乙女？私が？」

「若い女の子ならだれでも乙女なの。哀ちゃん意外におしゃれに興味あった気がするんだけど」

「幼児体型のときだよ。大人の体ではないから余計に飾り立てたくなったもんだけど、中学生になったらなんだか気にならなくなってる」

笑われた。

「まあ、これは俺からのプレゼントってことで。受け取って」

白光る手でグロスを握りこみぱっと広げると、軽く煙りをあげて小さな旗のつながりにくるまれて現れた。

なんだか面白い。

ふふ、と笑ってしまった。

怪盗さんもよく似た笑い声。

しばらく笑いのやりとりが続いて、ふと真顔になった。

「ここらへんでさ、あかりがばつとついて伯爵が出てきて、ふたり引き離されてルパンが地下迷路に落ちるんだよね」

「何の話？」

「ルパン三世だよ。カリオストロの城っていう映画、知らない？あの場面に、今似てるでしょ」

「囚われのクラリスが、ルパンとの逢瀬に笑い合うシーンね」

「そ。似てない？」

「そうかしら。似てると言ったら似ているかも知れないけど」

「でしょう？・・・あ、」

切れ目の言葉に、建物で凸凹になった地平線からうつすら光が滲んでくるのがみえた。

夜明け。

「もう帰らなくちゃね、」

立ち上がったその隙に、ぱさりと翼が広がる。

「満月の夜にしか怪盗キッドは復活しないと？」

「そゆこと。じゃまたね、哀ちゃん」

手すりを蹴飛ばして大きく宙に舞い上がったそれは、大きく迂回して太陽とは真逆の方面へ消えていった。

いつのまにか空はしらみかけて、太陽の時間が始まる。

朝ご飯作らなくちゃ。

つかの間の夢から抜け出し、現実へと後戻りしていった。

6 (後書き)

またまた逢瀬です。次こそはコナン君目線かしらん？

ここまで読んでくださってありがとうございました。

昨日から、ずっと頭の中で渦巻いている。

あの白いはらめきが。

夜中、寝苦しくなんども寝返りを繰り返した上、もう寝付くのは無理だろうとあきらめてカーテンをそつと開けた。

何かが足りない。

そんなことにとらわれて、足りないものは形式上わかっているのに違う気もする。

余っただるさが甘ったるくかわっていく。

とりあえず、今欲しいのは彼女だ。

灰原が横にいないければ満足に眠りに落ちることすらできなくなつた。

依存しすぎかな。

憎んでるって宣言したはずなのに、必要。

マイナスは、プラスが存在するためには必要なもの。

彼女は、どちらにも属さない0かもしれない。

そんなことをぐだぐだ考えながら、手の中では携帯電話が光っていた。

アドレス帳から呼び出すのも面倒だから、そのまま番号を打ち込んで耳にあてた。

『……留守番電話サービスに接続しております』

無機質な声のあとに、単調な電子音がなりはじめると、電話を切ってベッドへ放り投げた。

でない。

留守電なんか使う奴だったっけか。

いつもこうだっけ。

自分のことばかりで、思い出せば彼女のこと、細かくは覚えていない。

探偵として失格？

もう捨てたから。

ほら、また自分の事ばかりがモノローグに。

ふと意識の中に取り込まれた夜の景色のなかには、いつも通り阿笠邸がどんよりと立っていた。

彼女がいるであろう向かいの部屋に灯りがついているかどうか確かめる。

ついていないときは地下室に籠もって研究。

ついているときならもう眠りについていないはずで。

閉じられたカーテンが揺れもせずに外を絶っている。

寝ているのか、なんて思いながらふとベランダに目を移す。

「あれ、」

ふわふわと浮いている白い布。

ベランダが覆い隠されるほどの広さ。

いらりとくるくらい、なめらかで艶やかなそれは、

「怪盗、キッド・・・」

まさかな、なんてごまかせなかった。

ベッドのシートにはあんな気品はない。

風なんてほとんどないのに、空中遊泳しているそれは、あいつのマントとしか思えなかった。

でもいるはずがない。

あの日を境にぱったりと、消えてしまったのだ、表舞台から。

疲れてるのかな、なんて思ったりした。

なにかが壊れてしまいそうだった。

カーテンをばさりと引き、暗闇に馴れた瞳を閉じ、ベッドに潜り込んだ。

眠れるはずもなく、目はしばむばかりで意志を落とそうとはしなかった。

なんで電話に出ない？

なんで灰原の部屋にいる？

そもそもなぜあいつがいる？

言葉に出来ない疑問。

明日、なにかかわるだろうか。

灰原に早く会いたい。

流行のくだらない歌なんかでよく言われる会いたい。

なんでもいいから。

壊したくない。



「おはよう」

「・・・おはよう」

無口な朝。

歩調がばらばらでも、ふたり肩をならべて。

体をあわせていないと息苦しく感じるのは俺だけか。

「昨日」

「ん？」

「昨日、電話に気付かなくて。ごめんなさい」

「・・・留守電なんかしてた？」

束縛男みたいなセリフをはきだすと、「博士を起こすと悪いから」と平坦な声が帰ってきた。

なにかかくしてる？

ふいと彼女の整った顔をみつめた。

怪訝そうに顔をしかめる灰原。

人形のような白い肌と、やわらかな茶髪。

蒼と翠が交じった瞳。

唇。

「ん、」

顔を近づけて、触れるだけのキスをした。

甘い香りが鼻をついた。

ねっとりとした感触。

離さないまま、しなやかな体を抱きしめる。

「灰原？」

ほんとうに灰原？

こんな媚びた匂いしなかった。

つくりもののような感触は、知ってる灰原のものじゃない。

「おまえ、口紅、」

「・・・人からもらって、もったいないからつけてて、」

「キッド？」

とたんに腕の中の体が硬直した。

疑問が確信にかわる。

このまま止めておけばなにも知らないで済むのに。

「・・・夜、みたんだ。あれがベランダにいるのが」

囁く声は凍りついた。

窒息しそうな息苦しさ。

腕をゆるめると、抜け出て走り去っていった。

曲がっていった十字路をみつめながら、なんだか力が抜けていった。

蝕んでいたたるさが、引き締まろうとして崩れていくような、そんなイメージで。

文字通り唇が教えてくれるとは、笑ってしまった。

7 (後書き)

ターンポイントかもしれない。

依存気味の江戸川氏が書きたかったのです。

ここまで読んでくださってありがとうございました。

息詰まりのような時間。

過ごしてみたあとでは、簡単に「日々」なんてまとめてしまえるけど。

でもいまは、呼吸さえもどかしく、苦しい。

苦しい。

それは同じ。

からからと引き戸を開ければ、真っ白にひためく病室の匂いが鼻

孔をくすぐった。

何年ぶりだろうか。

枯れることのない花。

皺の寄らないシート。

動かない。

人形のように横たわり、かすかに呼吸しているのがわかる。

ほんとうに何処も白い。

なめらかな黒髪が散らばるベッド。

健康な肌。

あのころとなんら変わらない。

時間は滞っている。

近寄るのさえ許されないような気がして、ためらいながら緩く硬

直した腕に手を伸ばした。

「蘭、さん」

動かない。

あこのころの彼女だったら、罪悪感さえ感じる笑顔で、振り向いてくれるでしょう。

私が、こうした。

こうなった原因は、私にある。

そう思い知らされて、息苦しくなるだけなのに。

それでも言いたかった。

私が言う必要はないけど。

横に有る椅子に座って、ゆっくりと動かない顔をみつめた。

「必ず工藤新一はあなたのもとに帰ってくる。だから、そうしたら、どうか、」

あの笑顔を見せて。

独りよがりだけど。

解毒剤も、効くかどうかわからないけど。

自己満足な償いに過ぎない。

なにかが壊れそうな気がしたから。

私が誰と会っていてもあのひとには関係ない。

だけど、何故かな。

もう、先がみえない。

あしたの朝、ちゃんと目を覚ますかも分からない。

会っておきたいと思った。

最後に、まぶしさを焼き付けて。

ずっと音もなく立った。

もういちど振り返る。

デジャヴを感じるその場面に、ありがとう、と小さく呟いた。



「ねえ、コナン君」

「あん？」

放課後の教室。

ぱちん、ぱちんとホッチキスで積み上げられたプリントを留めていく。

学級委員の光彦の手伝い。

ペアのもうひとりの学級委員は風邪で休みだと。

外のざわめきが懐かしくもなく、二度目の中学生思い出の反芻も慣れてきてたいして楽しくなくなった。

「なんだか、変わりましたよね。コナン君」

「・・・どこが？」

ちらっとこちらを探るようにみて、また目を反らす。

ためらいがちに口をひらく。

「頭が良くて僕たちとはどこか違うのは昔からでした。けど、・
・蘭さんが、あぁなってから、取り乱したり、ボロを出したり、僕
たちで協力し合ったり、そんなのが減ったと思うんです」

「・・・そうか」

窓の外では、サッカー部だろうか、必死にボールを追いかけて回している。

どちらかのゴールに勢いよく飛び込んだボールは、集合のために拾われることなく転がった。

いつまでも子供だと思っていた。

だけど、もう成長してるんだな。

立ちすくんでいるままの俺と、たいして変わなくなってきた。

焦ってもしようがない。

「あと、僕、結構まえに言ったの．．．灰原さんのこと、おぼえてますか？」

「．．．おまえ、好きなんだっけ」

「はい」

大きく頷いた。

「歩美ちゃんは？」

「歩美ちゃんも、もちろん、大好きです。幼なじみですから。でも、灰原さんが好きなんです」

見つめた瞳は濁ってなくて、俺を丸く映し出していた。

「．．．あいつだけはやめとけて」

零れた言葉に言い覚えがあった。

くすりと笑う。

「まえも言いましたね。それ」

「そうだな」

俺も軽く笑った。

「ほんとにあのころは、コナン君たちの空気が不思議でしたって
いまでもそうですけど。」

でも、見ちゃったんですよ。いつだったかな、放課後」

「放課後？」

「コナン君、不純異性交遊はいけませんよ？」

ホッチキスの手を止めずに何気なしに言う。

ちよつと止まった俺。

「光彦、」

「コナン君がそうなら、仕方ないですけど。でも、ちゃんと大切にしてください。最近の灰原さん、出逢った頃のように戻ってます」

俺の手元にあったプリントを抜き取って留め、とんとんと揃えて廊下へ向かっていく背中。

「一途なのも大切ですが、目の前のものから逃げているばかりじゃ傷つけるだけですよ」

からり、と開け、すっと消えていった。

涼しい風が木の葉を巻き上げながら透いてきた。

8 (後書き)

灰原さん↓江戸川氏で目線が移動。

いかにシンプルな言葉で綴るか、光彦君をませさせるかに力を注ぎました。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

おとといも昨日も今日も、窓際三番目の席は空いたまま。

セピア色の机はしなやかに橙がかったきた外の明るみに照らされ立っていた。

「どうしたんだろ、哀ちゃん」

「お見舞いに行こうにも、移したら迷惑だからって受け持ってくれないんですよ。そんなに酷い風邪なんでしょうか」

「ねえコナン君、なにか知らない？」

ずっと意識をうつろにしていたのが引き戻される。

しばつく目で歩美たちのほうを見ると、一斉にこっちに視線が集まった。

「わかんね。電話も出ないし入れさせてくれないし」

「でも博士がいないんでしょ？今。哀ちゃんだけで大丈夫かなあ」

「博士もひでえよなー、灰原が風邪引いてんのにフサエさんとパ
リとかさ」

「いえ、彼女のことですから博士にも言っていないのかもしれない
せんよ」

「あるかも！」

たぶん風邪なんかではないだろうと思う。

ちゃんと洗濯物もひとりぶん干してあるし、夕飯の匂いも香って
くる。

でもそれじゃなんなんだ、と考えを巡らせては何か頭の中がぐにやぐにやとしたものに汚染され、途切れてしまう。

ただの寝不足だな。

だって寝れない。

こんなに灰原と会ってないことなんて、久し振りで。

そろそろ倒れそうだ。

ふああ、とまた大あくびをした。

「でもそうしたら、やっぱり博士にいつておいたほうがいいのかなあ・・・」

「でもよ、担任、風邪とは言ってねえじゃん」

「ですが学校を何日も休んでいることについては報告しておいた方がいいんじゃないかと思います」

「俺が言っとく」

「え？」

ついでた言葉に、またまん丸な目が六つ向いた。

「おまえら、博士のケータイの番号知らねえだろ」

「あ」

しまった、という小動物が熊にでも見つかったような表情で口をぽんかり開けている。

「博士もケータイ持たずに外出すること多いし、外国だからつながるかも分かんないし。」

灰原のようす見てきて、支障があるようだったら博士になんらかの形で連絡する。それでいいだろう？」

押し黙った三人がこつくりと頷いたところで帰りのホームルームのチャイムがなった。

☆

正面からベルを鳴らしてもたぶん受け継いではくれないだろうから、裏口からこっそりと入り込んだ。

人がいそうないなさそうな、曖昧な空気が流れていた。

けれどストーブもテレビもお茶の飲みかけすらもなくここにいた形跡はない。

だとしたら地下室。

とんとん、階段を下りていくのとノックする音。

「・・・灰原あ」

反応はない。

ドアに耳をつけると、かすかにパソコンのキーを叩く音が滲んできこえてきた。

一瞬そのかちやかちやした音が止まり、また開始する。

居留守を決め込もうとしているらしい。

「歩美たち、すげえ風邪なんじゃないかって心配してて。様子見に來ただけなんだけ、」

「邪魔しないで」

切り捨てる冷たい声が見えた。

「最後の詰めなの。これが終わったらもう、」

はっと言葉を飲むのが分かる。

「もう?」

「・・・なんでもないわ。とにかく風邪だといっておいて。心配かけるから」

「なんなんだよ。なにが詰めなんだよ」

「あなたには関係ないでしょう？早く帰って」

「関係ある。つくってるの解毒剤だろ？」

「っ」

勢いの言葉が凶星をついたらしい。

彼女は、まだあのやくそくを守っていたのか。

忘れられるはずもない。

責任感が人一倍強い灰原のことだから。

なんで今まで気付かなかったのか、自分が情けなくて悔しくて、ドアに拳を打ち付ける。

気付かなかったんじゃない。

目をそらしてただけ。

一瞬怖いくらいの沈黙に胸が痺れる。

「これが最後の償いなの。自己満足でも独りよがりでもいい。償いたい。だから放っておいてよ」

聞いたこともないような荒い叫び声だった。

少し怯み、またドアを蹴り返す。

「俺、そんな償いとかいって解毒剤もらってもなんも嬉しくねえよ。これでもまだ良心残ってんだぞ、甘く見んじゃねえよ」

沼地のヘドロのような濁った低い声が言葉をなぞる。

静まりかえり、その一瞬のあとに薄くドアが開いた。

酷く疲れ切った灰原の顔が青白く見えた。

「近所迷惑だから・・・中入って」

9 (後書き)

短めです。

一波乱あるようなないようなといつても。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

「中入って」

招き寄せる。

思い詰めたような顔は、ただひたすらに黒髪の彼女を追いかけていたときの小さい彼の姿によく似ていた。

どう思っているの。

どう感じているの。

都合のいい女のいなくなる不便さを恐れてか。

すこしでも残った解毒剤の確率を握った女を失うことの恐怖か。

どちらでもいい。

このひとがどう思っているように今はどうでもいい。

「早く」

なるべく艶やかに、なめらかに、女狐とまではいかずに。

呼ばれるままにふらりと敷居を超えてきた彼の首筋に、素早く麻酔銃で針を打ち込んだ。

奇声をだす暇もないまま、力を失い倒れてきた体を抱き留め、引きずりながら簡易ベッドに横たえる。

触れるだけのキスをいちどだけしてから、用意していた鞆とコートを羽織ってゆつくりとドアを閉めた。



それから私は遠く、海の近くの街に出た。

ことりことり電車に揺られながら、すぎてゆく家並みを眺めていた。

眠らせたのは追いかけて欲しくなかった。

止めて欲しくなかった。

さびれた駅に一人降り、遠くなってゆく電車を見つめるのも寂しくて、足早に駅を出た。

潮の匂いをする。

でも立地条件や交通の便が悪いせいかな、住居は古くからのものばかりだった。

緑も少なく、色が少ない白黒の街。

通りすぎる人々もモノクロに見えるのは何故だろう。

ぎゅっとマフラーを握る。

寒い。

手袋をしても上着をいくら羽織っても、この寒さをあたためることは出来ないだろう。

ひとりでは。

何、自分でここへ来ることを決めたのに、何故感傷になんて浸ってるのよ。

馬鹿じゃないの。

急ぐことはなにもないから、ゆっくりと歩いて行った。

ふと振り返ればさっきまで渡っていた白い川に掛かる橋があんなにも遠くなっている。

それでも歩いた。

前に一度、父の幼なじみだという人の所へ連れて行ってもらったことがある。

そのトイレにお姉ちゃんが隠していたものは、母が遺した私宛のカセットテープだった。

擦り切れるほどに、自分の年齢に宛てられたメッセージを聴いたものだ。

記憶さえもなく顔だって写真でしか分からなかったけど、落ち着いたあたたかい声は姉と同じものを感じて心が安らいだ。

11歳から20歳までのメッセージが入っていて、20歳を超えたときに最後のメッセージを聴いた。

テープを止めようとしたときに、思い出したように話し出す母の声。

『もし志保が困ったときや行く当てのないときは、まあそんなことにならないのを祈っているけど、お父さんのお母さん、つまり志保のお祖母様ね、そこへ行きなさい。日本の外れた海辺の街。寂れて人もあまり寄りつかないけれど、とても好きな街なの』

住所と喫茶店だというお店の名前を告げて、ほんとうにテープの音声は途切れた。

幼児化したことも何も、そのひとは知らない筈でも。

いちどだけ、組織の壊滅を機に手紙を出したことがある。

会ったことも顔さえも知らないはずなのに、このひとなら信じる
ことが出来ると。

そう思ったのだ。

直感を信じて予防線を張るのは悪いことじゃない。

そのとき、決めた。

会いに行こうと。

会いに行くべき時に、会いに行くと。

行くべき時がきたと、そう確信して今日はここに来た。

ゆるやかな段をゆっくり上っていくと、そこは丘だった。

古びたベンチがあり石の柵があり、そこから見下ろせる下界はなかなかこの足のむくみに見合う景色だった。

色彩の薄い家並みが、姿は違えど同じ方向を縁取っている。

そこは蒼を夕日に染め変えられた海。

そのせいで空と海の境界線がよく分からない。

海を映す空、空を映す海。

海の真ん中に太陽が沈むなんてことも、合成写真のような遠い歴史。
史。

叙情的なその光景は、ふと懐かしい気持ちにさせる。

しばらくそれを眺めていると、風がふわりと辺りのものを流した。

足にぱたりと黄色いものが張り付いて、何かと思ったらいちようの葉であり後ろを振り返ると蒼海に向かい出すように柵を跳び越え消えていった。

これじゃ何もかもが海へ流れ着くようね。

下手な三文小説としてもセンスのない考えは取っ払って。

住所に拠ればここの近くなんだけど・・・。

きよろきよろと地図と街を見比べしていると、耳を潰しそうなほどの突風が吹き抜けた。

「あっ」

地図が上空に突き上げられどこかへ見失う。

髪の毛とマフラーが顔に纏わり付くのを厭って、それでも黄色の葉が渦を作って群れながら回る。

それが止んだ頃にはもう地図の姿など見当たらなかった。

眉間に皺が寄っているのが自分でも分かる。

こここの近くであることは確かだから、喫茶店らしきところを回ってみるかため息をつく。

「これ、あなたのもの？」

いちようの葉の隙間から見えた紫だちたる瞳だけが、こちらを射
竦めていた。

10 (後書き)

海辺の街ってのはいいものですね、ええ。

海にはまったく縁がなくどちらかいえば湖や川なんかが好きなんです、生命の母なる海には惹かれるものがあります（＾―＾）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

11 (前書き)

キッド様＋江戸川。

ぱちりと目を開けた先が、一瞬理解出来なかった。

見慣れないアングルと空気の匂いで、ここは地下室だろうかと思
い至り、そして簡易ベッドに横たえられていることを知る。

眠っていたのか。

首を回してわずかに走った痛みに、いやそうじゃない、と見当違
いなことに気付く。

眠らされていた。

灰原に招き寄せられて、そこから記憶がない。

でも面白いくらいに想像できた。

夢遊病のような入ってきた俺に即効性の麻酔針を打ち込んで、倒れてきた俺を受け止めて、あ、でもベッドまでどうやって運んだんだろう。

引きずりでもしたのかな、でも最近不健康に体重が落ちてきたからそんなに苦でもなかったかもしれない。

それから、コートでも羽織ってそっと地上へ出て行ったのだろう。

ひとりで、どこか彼方へ。

灰原の姿がどこにもない部屋を見て、その確信を持つ。

テーブルの上に置いてあった瓶の中に、見覚えのあるカプセルが

ひとつだけ入っているのを見て、背中の辺りがずっと冷えていくのを感じた。

それなのに目が熱い。

しばむほどに熱く、視界が白みがかっていてよく見えない。

泣いているんだと、自覚して泣いた。

なんだよ。

ひとりで飲めったのか？

感謝なんかいらないから、ひとりで戻れったか？

俺のこと、そんなに強いとか思ってたのか。

弱い。

お前がいてもいなくても、こんなに弱い。

依存し合う関係なのかもしれない。

それでも、居て欲しいことに変わりはない。

「なーに男泣きしちゃってんだよ、めいたんてー」

ふとあんまり予想外な声が聞こえて、はっと振り返る。

ただひとつある小さな窓に肘をかけて顔を出していたのは、まぎれもなく『あいつ』だった。

「おまえ．．．」

「おーっと捕まえようとか思うなよ。今俺はキッドとしてじゃなく、一般人として尋ねてきてるんだから」

たんまたんまと手を振るそいつは、ひょいと杵を超え降り立った。白いコソ泥の仕草が隠しきれていない、優美で傲慢で華麗な佇まい。

「いつから見てた」

嫌と言うほど流れていた熱い涙もぴたりと止まる。

「お前が麻酔かけられて哀ちゃんが出てくところからかな。お前、目がイッててやばかったぜ。寝てすっきりしたか？」

「灰原はどこにいる」

「知ってどうする」

切り込む一言に、いきり立った言語機能は停止した。

そいつは軽く笑った。

「脳みそまで中坊になったのか？ 女ひとりも守れねえとは墜ちたもんだな」

「黙れ」

「凶星突いちゃった？ へえそうか、自覚してるんだ、」

「黙れつつってんだろ！！」

行き場のないもどかしさと恐怖が、激しい怒声になる。

いままで我慢してきたものが、声となり涙となり止まらない。

だけど俺の我慢してきたものなんて、灰原のものとは比にもならないんだろう。

眠りに墜ちる一瞬にかいまみえた、諦めに似た笑みが蘇る。

目の前の相手は、面白そうに口をつぐみ、くいつと首を上げた。

俺は目を綴じる。

「お祖母さんのところへ行ったよ」

脈絡もなくそいつは言った。

少し考える。

「灰原に、存命してる血縁関係のひとがいるってことか」

「そゆこと」

頬が冷めていく。

頭も冷静になる。

少しは、物事を考えられるようになる。

「哀ちゃん、お母さんの肉声が入ったテープ持ってただろ」

唐突に始められた話に、思わずこくと頷く。

蘭が笑っていた頃は、幾度となくあれを聴きながらうたた寝をする灰原を見掛けた。

毛布とかジャケットとか、かけてやってたっけ。

にやりと口角を上げこちらを見つめるコソ泥に、もったいぶるなよと催促の目を向けた。

「たぶんそのテープに、おばあちゃんがいるってことをお母さんが言ってたんじゃないかな。それもかなり正確に細かく」

「会いに行った・・・ってことか」

「肉親が生きてるって知ったら、会いたいのも当然でしょ。それが哀ちゃんならことさらに」

両親も物心つく前に亡くなり、姉も組織に抹消され、血縁関係では天涯孤独となった彼女。

母親の声で祖母という近い肉親の存在を知らされ、動かないはずはない。

でもひとつ気付いて、

びくりと震えた。

「灰原は・・・帰ってこない、つもりなのか」

口にしたら、怖くなった。

背筋がひやりと寒くなる。

どうなっているか自分でも分からない表情を見られたくなくて、背中を向ける。

ちっちっち、と舌打ちを繰り返す音が静かに地下室に響いた。

「それは名探偵次第」

ぼんつと短く派手な音が聞こえ、振り向くと煙の名残の中に紙切れが落ちていた。ただだった。

拾ってふちに指を引っかけると乾いた音をたてて開く。

しばし中身を凝視して、ぎゅっとメモを握りつぶした。

あいつが何をしたいのか、全然見当もつかない。

でも今は考える時間もない。

灰原を追いかけること、それしか頭になかった。

11（後書き）

江戸川氏が正気に戻る話。（なんじゃそりや

哀ちゃんがお母さんのテープ聴いてるところすごく可愛いですよね
（＊、旦那）　どんなこと言ってるんだろう、でもきつと普通のお
母さんの会話だよね。原作ではあれにも伏線がばんばん張られてる
わけですが、いつになったらわかるんでしょうか。

読んでくださったあなたに無数の感謝を捧げます。

12 (前書き)

英理さん＋蘭姉ちゃん。

「ほら、今日は花じゃないのよ」

語りかけながら英理は、ガラスの平皿に水を零す。満たし、ビール袋の結び目を解くとふわりと道の匂いが散漫した。

いちようの葉。

まっすぐに突き抜ける並木道で、綺麗なものを拾い持ってきたのだ。

肌が不健康に白くなっていく自分の娘が、哀しく見えた。

泣いてしまうほど慣れを受け止めていないことはないけれど、ふと目覚めるときが想像出来ないことが英理にはあった。

そんな考えを振り払いたいのに、そう思うほどに肥大化していく。

「もしね、蘭・・・あのひとと、やりなおすことにしたっていったら、驚く？」

まぶたに視線を固定したままベッドの向こう側にまわり、力ない手首をきゅっと握ってみた。

体温があるのに反応がない。

蘭が今のままになり、小五郎はすっかり萎んでしまった。

昔のような酒と賭け事に傾いているような生活を見ていられなくなり、一緒に暮らし始めたのを今日は報告に来たのである。

『やりなおすなんて、お母さん、終わってもなかったでしょ!』

きつと苦笑いでも期待がなかったことに喜んでくれる。

喉につかえて詰まっていたため息に、差し込む太陽の光が揺れた。

「でもね、蘭、あのひと、私が来たらすこしはよくなったけどね」

良くなったのだろうか。

英理は疑念が頭に過ぎる。

自分では埋めきれないほどに、小五郎に占める娘の存在は大きかった。

どうしようもない馬鹿ね。

自分の娘に嫉妬して、どうするの。

「やっぱり、蘭がないとだめよね」

手をやさしく揉む。

滑らかな肌は、空手をやり続けていればなかったものだ。

ふいに目の前の子が薄ら目を開けた。

「おかあ、さん．．．」

漏れ出た声に、心臓が止まるかと本気で思った。

裏返った状況認識能力は声をもひっくり返した。

「蘭！　蘭、私の、私の声、聞こえる！？」

「え？．．．　うん、聞こえるけど．．．　どうしたの？　あれ、私、いま、病院．．．」

「蘭！！！！」

衝動に駆られ強く抱きしめた。

涙が蘭の髪を濡らす。

「どうしたのよ、お母さん．．．そんなに私、あぶなかったの？」

「あぶないなんてものじゃないわ、蘭、起きるならひとこと言うてから起きなさい」

「そんな無茶苦茶いわないでよ」

懐かしい声が耳元に聞こえた気がした。

ふと英理は目覚める。

リフレインに見える、変わらず眠り続けている蘭。

手を握りしめたところから自分の妄想だったことに気付いた。

だめ。

自分が思うより参ってる。

夢と現実の区別もつかないなんて、相当なものね。

横でただよう黄色い葉と、

あふれ出す熱い涙だけは本当だった。

12 (後書き)

英理さん視点でした。個人的に英理さんはコナン界ぶっちぎりでツンデレだと思っています。蘭姉ちゃんも和葉ちゃんも、英理さんにはかなわんね、ツンデレじゃ。

感情を入れない文にしてみようと頑張ったんですがこれが限度。

ご読了ありがとうございました。

向かいでカップに口をつけている美しい老女にそっと目配せをした。

肌寒い秋、薄いショールを羽織っただけのか細い体が寒々しい。
銀杏の葉越しに見た紫の瞳は、じっくり見ると青が勝っているようにも見えた。

眠らせてきたあのひとによく似た色だった。胸がちくりと針で深く刺したように痛む。

端的に包み隠さず自分の過去を伝えてもその眸には変化が無かった。

根拠などどこにもないけれど、この老女はすべて理解してくれるような気がしてならなかった。

問い質す面倒を嫌い、受け入れる寛容さを感じる。

それでも、こんな得体も知れない子供の喋る身の上話など――
真面目に取り合うようなお人好しだったらの話ではあるが。

「・・・信じる方がおかしい話だと思いますが、本当のことなんです」

呟いた言葉は、己に聞かせるために言っているよう。

予防線を張っておく、自分の弱さが嫌いだ。自覚して嫌悪しただけで終わらせてしまうクセも。

発した言葉に嘘は無かった。

自分でも今となっては夢のようだと思う、けれどその証拠として子供達、蘭さんが目覚めない現実、工藤新一がいないという認識、そしてあのひとがいる。

瞳を見つめた。こちらからみて左の眸の虹彩に視線を求めた。

その瞳がぱっと幕をあげ、口元はにやり、緩んだ。

「だったらその話を信じる私は、どこか精神に異常をきたす変人だって言いたいよね？」

「え？」

いたずらを思いついた少年にも似た煌めきが過ぎる。
驚いた。

「興味深い話をどうもありがとう。私は信じるわ、だってあんまり突拍子もなく逆に真実味があるんですもの」

思わず呆けてしまった。

老女はまぎれもなく笑っていたからだ。しばらくころころと笑っていた。

「高度な研究をさせてくれるところを見つけたんだって言って、それが最後だったわ」

引きずったままの笑いがしどろもどろと消えゆく。

がたがたの窓から、弱々しい風の音が聞こえてくる。

足下の床が目に入る。擦り切れて穴が開いただろう箇所、ボロボロの板が繋ぎ合わされていた。

「厚司とエレナさんが亡くなったので火葬しておきましたってお骨が送られてきてね。お墓もだびにふしたんだけど・・・子供はどうしたろうって。

確か女の子がふたりいたはずなのに。でもまさか・・・生きてるうちに会うとはね」

祖母の存在などあのテープを聴くまで知るよしもなかった。
最初はただの進んだ技術を持つ組織だと思っていたのか。
なぜ死んだのか。
死期を悟った？

脈絡も無くさまざまな憶測が構築されていく、でもとても先は見えない。

「厚司ひとりしか子供はいなかったし、おじいさんももうね．．．
手紙を読んだときは何かのいたずらかとも思ったんだけど」

老女は優しい表情をしていた。

「こんなに若いのに．．．いろんなことたくさん頑張ってきたの
ね。ごめんね、なにもできなくて」

白く皺が柔らかく寄る手が頬に触れる。

心地よく冷たくすべらかで、安心してしまいそうだった。

「ほんとうに、エレーナさんそっくりだわ」

「あ、・・・」

初めて実感という気持ちを浴びるよう。

これが愛か。

世の中で言われる慈愛。

こんなに穏やかで痛みを伴わないものだったなんて知らなかった。

愛とは痛みの上に成り立つものだと思っていたし実際そうだったのだ。

目を閉じる。思いのかけない声でした。

「っ、はあっ、灰原っ」

前々から解せなかったことなんだけれど、

どうしてあなたは、逃げるものを追うことにこんなにも執着するのかしらね。

13 (後書き)

ちょっと短いかもしれやせんが、これ以上潤色はするべきではなかったので申し訳ございません。そして季節が秋なのもすべて東野のせいです（・ω・）

灰原さんとコナン君がどういうふうに向かい合うのでしょうか楽しみです。ありがとうございます！

老女と向かい合っていた灰原が、こちらを認めた。

思うほど長いあいだ見ていなかったわけではない彼女を目の前にした。重い安心感と懐かしさが襲う。

そう感じたのは自分だけだ。灰原はそんなこと思っていない、見れば分かる。恐怖だ。

「灰原」

「・・・何よ」

「戻ってこい」

なんでこんななんも考えてないようなことしか言えないのだろう。

「なぜそんなことを言うの」

「俺がそう思うから」

「・・・あなたには関係ないでしょう」

「関係ある。何したって切れねえんだよ、俺たちは」

彼女の瞳が一瞬揺れた。

それもつかの間ひとつ瞬きをすれば感情が落ちる。ずっと寄ってきたかと思えば耳元に冷たく囁かれた。

「我が俤ね」

言葉は暖かい。息の温度の低さに悲しくなる。

「なんだ・・・知らなかったのか」

「違う。私のこと」

「我が俤、か」

「そう。そんなことも忘れようとしてあなたの傍から離れた。眠

らせてもどこかで追いかけてくるだろうって分かってたわ。それを期待して逃げてきた。我が侂じゃない」

「うん」

「あなたがたとえどんなふうにも苦しくても、私はあなたといなければならぬのかもしれないわね」

俯いた。

「葉、飲んだ？」

「飲んでない」

「どうして？」

「飲んだってどうせ、戻れるわけじゃねーし」

自分の言っていることがどれだけ彼女のプライドを傷つけるかわかっている。

でもそれを排除してしまったら、何も残らない。それ以外なにを伝えたいのか知らない。知ってたらとくに言ってる。

灰原の細い手首が所在なさげに垂れている。その肩越しに老女がいる。

ぞっとした。死体が座っているように見えたからだ。

この人は、本当に灰原のお祖母さんか？

人形のような無機質な不気味さも柔和な笑みの奥にある底知れないものも、灰原とはどうしても重ならない。

一瞬飛んだ意識の底で、灰原の栗色の髪がさらりと動いた。

「約20%。あなたならそれだけあれば十分だとか、言うんじゃないの」

「・・・俺、工藤新一に執着してるか」

「してないと言い切れる？」

肯くと、灰原の結んだ薄い唇がゆるむ。ちょっと驚いた表情になる。

生きていられること以外に過去は意味をなさない。戻ったって蘭が目覚めますとは限らない。蘭以外に工藤新一がいる理由などないと思う。

迷った。灰原に俺が思ったとおりに伝わるか分らなかった。迷っていたら灰原の声が震えた。

「ごめんなさい」

「はいば」

「ごめんなさい、工藤君」

零れた涙に気付いたときには、もう二つの微かに緑が混ざる瞳のふちに涙が盛り上がっていた。

手を伸ばす。指先ですくい取る。苦しい。泣くなと言っても涙が止まるだけのことで膿は出ない。口には出せない。

すべて抱えて、それでもなんとかやり過ごしていくことなんて出来るんだろうか。

その答えが灰原にあると思った。

最近は何となく避けていた、殺人事件の興奮がどこかで芽を出す。間違いない。違えるはずがない感触。

灰原を睨め付けるように見つめた。濡れた睫が瞬く。聡明さと知性をあます所なくたっぷり含んだ瞳。

「帰ろう」

「？」

「家に帰る」

「・・・はあ」

「んだよ」

「嫌味？」

「なんで？」

「あなたは今も生まれたときからも変わらずいつも待ってる人がいてくれるんでしょうけど私には」

「バーロっ」

唐突に声を荒らげたからか、灰原がこくと首を傾げた。可愛らしさが頭をもたげる。

「オメー誰に向かってんなこと言ってんだよ。歩美たちとか、博士が泣くぞ」

「・・・ごめんなさい」

諦めでもない微笑みが灰原の頬に浮かんだ。

足りない気がして言ってみた。

「あと、俺も」

言葉にしてみても実感がひたひたと押し寄せてきて、ああ嘘なんかじゃないんだと思う。

自己満足に過ぎないものは捨てる。

バカ。前髪が流れる華奢な顔の唇はほとんど動かずにそう呟いた。なんと言えはいいのかわからなそうな表情をしている。たぶん俺も同じような顔をしているだろう。

バカだよ。どうしようもないアホだ。罵ってくれ、むしろ頼みたいほどだけれど、鼻で笑うだけだろうな。

「帰きなさい」

ふと引き戻される。

老女の声だった。

「あの」

「あなたには、あなたをととても大切に思うひとがたくさんいるみたいなもの」

灰原と俺に視線を滑らせ、柔らかに笑う。

さっきまでの死んで見えた瞳が嘘のように輝いていた。

「あなたはそれを捨てて自分のためだけに生きるなんてこと、出来ないんじゃないの」

「・・・はい」

何故か俺が肯いていた。自分が反応するところではなかったと遅かりし気付く。灰原は微動だにせず老女に視線を注いでいる。

「寒いでしょう、何か飲みますか」

言われて今までは感じもしなかった喉の渴きが来る。引きつって痛い。つい灰原の名前を呼ぶ。ひと睨みされるかとも思ったけれどそんなことはなくて、

では紅茶をふたつと申し入れた。

「でね、厚司ったらそこでうん、うん言っただけ聞いて始めちゃったのよ。もともと憎たらしい旦那さんに無言電話をかけるつもりがそのときは風邪で

朦朧として番号を回しちがえちゃったらしいのね。あっちも間違えたことすっかち気付かなくて半日くらいずーっとうんうんって。もうおかしくっておかしくって」

くすくす心底面白そうに話す老女の話に真面目に耳をかたむける彼女。

灰原の横顔をぼうつと眺めていた。

姉以外に血の繋がった人間などと関わりもなかったであろうこと、物心つく前に亡くなった両親の小さいころの出会いだったりおもしろおかしい話だったり、

灰原には暖かいというよりも未知で分からない戸惑うものなのかもしれない。ちよつと見守っていたい気もする。いつまでたっても

慣れきれないままなのかもしれないし、すっかりあいつらのいいお母さんになってしまうのかもしれない。

俺が勝手に灰原を見ていたいと思うだけのこと。

時間が最高の治癒力をもつことを信じ切ってはいなかった。

14 (後書き)

東野は行き当たりばったり何年前にああしたとか年はいくつだとか名前の由来だとか書き留めないのて書いたことを確かめるため読み返して呆然といたしました＼（＾o＾）／ なるべく灰原さんと江戸川さんが原作と並べて読んでみても違和感がないようにしようと思ひまして・しかし江戸川さんはわっかりにくいったらありやしません。

暮れの空は病的だと感じる。

腐った柿のような朱色がのったりと濃い。そのくせ、すぐに闇を重ねた深い藍色へと飲み込まれる。それを人々は美しいと、心をつらわれると言う。

土手の遠くには当然川がゆるやかに流れ、舞台のスポットライトさながら輝くそれを視線に留めて哀は歩いていた。

少し離れたところに見慣れた背中がいた。言葉にして考えることから目を逸らしてはきたけれど、出会った頃からずっと見つめるたび苦しくなる。その窮屈さを求め私はまた、あの人を眺めている。

つま先に目をやる。

マフラーに口が埋まる。

一歩また足を繰り出すと、コナンが振り向いた。ふと口をつく。

「お腹すいた？」

「は．．だ、何、いきなり」

「今日の夕飯何がいいかしら。考えてないわ」

困ったように唇を尖らせた、微笑む。

「お腹、すいてない？」

「．．．言われてみれば」

「さっきからぼうっとしてるみたいだから、疲れたのかと思って」

「おまえがあんな強力な麻醉銃使うからだろ」

「毎日のようにそれで探偵事務所の探偵さんに狙いを定めていたのはどこのどなたさんだったかしら」

「・・・」

拗ねたのかぶいっとそっぽを向いて早足で歩いて行く。今だけ見れば年相応。

私の罪は重い。たくさんの命が自分の作った薬で不本意に死んだ。曖昧にごまかすことは簡単だけれど、赦すことは出来ない。

彼の解毒剤を作ったのも自負心を満足させるために過ぎない。償いする方法などどこにも転がってはいないのだ。

逃げるな、と。

運命から逃げるな、と言われた。

しがらみをすべて解いてしまえば今の私には、その言葉しか残らない気もする。

堪えて偽名を呼んだ。

「んだよ」

「好きよ」

ぼろりと本音が漏れた。表面張力に耐えられなくなった水のように。絞り出した気力のように。

「・・・え、あの」

「江戸川君」

見据えた。もう目は逸らせない。

コナンは気の抜けたような顔をしている。少し苛ついてコナンを追い抜いて駆けていった。待てよと耳が掠め聴きすぐに肩が掴まれる。

「言い逃げとかねーだろ、灰原」

「もっとズラズラ並べた方がいい？言っただけでもいいけど」

「違うって。俺なんも答えてないから・・・」

「答えて欲しくて口に出したわけじゃないわ。忘れて。行きましよう」

「逃げるなよ」

見上げた。そこには変わらずビー玉のように丸い瞳があった。見慣れているようなまったく知らない眸のような、デジャブが感じられない。

「逃げるなって俺言ったよな」

「言ったわ」

それに支えられている。

「それからおまえなんにでも向かい合うようになったから、よかったなって」

「あなたにはそう見えてただけでしょう。自惚れないで」

「そりゃ自惚れてるかもしれないけど」

「分かってるなら言わなければいいじゃない。ご自慢の頭脳が廃れでもした」

延々と続きそうな押し問答を止めて私は先を歩き出した。

進んでいる空は藍色が迫ってきていた。夕暮れの時間もうすぐ終わる。

寒さも夜になれば深くなっていくだろう。その前に電車に乗らなくては。

途中まで考えてふいに笑ってしまった。私はあの町を思い出から逃げようと唇を噛みしめていたんじゃないのか。本当の覚悟なんてしていなかった甘く緩い決意だった。しないほうがよっぽどな、決意。

マフラーの柔らかい暖かさにしばし沈黙したけれど、やっぱり空気を読まないのは名探偵だった。

「あのさ」

答えない。

「俺、死ぬよ」

「・・・は？」

「工藤新一は死ぬ。いや、今死んだ。だから何も気負うことなんかない」

「馬鹿じゃないの」

私は言った。相づちを返してから思考の中で反芻して、言っている意味がやっとわかる。

昔から成長がないんじゃないの。言葉を選ぶセンスがあまりにも感じられなくて、笑っちゃうんだけど。

憎まれ口を叩こうと口を開ける。なにも言い出せない。

「よく考えたらさ、10歳も若返ってもう一度青春できるなんてめったに出来る体験じゃねーだろ？楽しんどかないと損だよな。江戸川コナンも悪くねーんじゃないかなって思ってる」

川のほうを見つめながら相手は言った。

私への皮肉で言っているのか心底からそう思っているのか読めなかった。眩しい。揺れる身体を立ち止まらせる。眉が寄る。

「のんきね」

「何とでも言え」

「ふん」

ふとコナンの瞳から中途半端な感情が消えた。

「蘭のこと、待ってようと思うんだ」

「・・・そう」

あなたが生きていくのなら、工藤新一の影は振り払えない。

「死なないわ。工藤新一は死なない」

「・・・灰原」

「誰が気に留めなくなってもあなたが忘れたとしても、私だけは絶対に覚えている」

言うてから、酷く真面目に言うてしまったなと少し後悔した。

「さんきゅ」と彼は呟いた。何を感じているか分からない表情だった。

安らぎがつかの間を支配する。

殺人事件とミステリと幼なじみをこよなく愛する名探偵さん。
やっぱりそんな筋書きが一番しっくり来てしまう。元からあるものに敵うものなどそうありはしないのだ。

「あの子にもそれ、言うてあげたら」

「いや．．．口に出さないほうがカッコイイ気がする」

「悪い癖ね。あの子の理想の王子様であろうとする」

「そうかな」

「あの子はあなたが思うように弱くないわ。そうね、うん．．．
女は男がいなくてもやっていけるものなの。思い上がりよ」

言ったそばから腐っていく言葉。伝えたいことはこんなことではない。語彙力がないわけではないはずなのに、何も言えない。
かもな、なんてわかっているのかいないのか、頷く彼。

「待ってくれてるって思い込んでるやつのほうがよっぽど弱いのかな」

さあね。

心の中ではぐらかしてみる。届きはしない。

目の先に広がったものが今、江戸川君にはどう見えているのだろう。

15 (後書き)

イノセンス15話目です。これで最終話でもよいと思っていましたがやはりふたりがケリをつけて終わりなんてそんなのはいけないなとなりました、あと一話か二話続く予定です。

世界を包む夜空には、満月がぼっかりと浮いていた。
清々しく、どこか寂しげなそれを横切る白い翼に哀は気付いて、
ふと頬をゆるめた。

「また来たの、怪盗さん」

音もなく翼をたたんだ白いその人は、手首をくると回して小さく
紅いバラを指にはさんだ。哀の手にそれをそつと握らせる。

「今宵は満月ですから」

「そうね。綺麗な満月だわ」

微笑んだ彼女の髪が揺れる。冷たい風が頬を撫でてゆく。不思議なことに寒くはない。

静かに問う彼の声は風いで、哀は夜の街並みをただ見つめていた。

「ここに留まるのですね」

「・・・江戸川君に居場所をバラしたの、あなたでしょう」

「彼に選択を委ねただけですよ」

「確信犯ね」

「はい」

キッドは穏やかに笑って見せた。

「もう、ここへは来ません。あなたは今、生まれ変わった朝とともに目覚める運命にある。運命など定められていずとも、あなたは自らの力できつと」

「そうだいいけど」

「何かお望みはありますか。最後の」

最後。

なんと魅力的な言葉だろうか。どんなことでも願えそうなその響きに一瞬酔わされ、哀は目を伏せた。

「なんでもいいの」

「私に叶えられる望みならば」

「・・・あの子を」

言いかけて口をつぐむ。

あの子が目覚めれば、また苦しむことになる。中学生になり工藤新一の面影が色濃くなってきた彼を見、彼女は超越した数年間にきつと戸惑う。そんな目で自分を見る彼女の思いにコナンが気付かないはずがない。

力が抜けて笑えてくる。こんな仮定はおかしい。

他人の幸せなど、他人にはわからない。いくら予測してみたって、

すべてを知ることが出来るわけじゃない。彼女が目覚めることをコナンがひたすら祈っていることくらい知っている。その先の未来など、決めつけられるわけがない。

キッドは神でもなんでもない。彼を困らせるだけだ。

「彼らなら心配なんかしなくたっていいでしょう」

あのふたりなら、壊れることはない。

感情の中で、崇拜の色さえ見せてきた認識の意味も込め呟いてみた。その一方で狂いそうなほどに感じる羨みは、夜の薄明るい風に飛ばすフリをした。

「そうね」

「けれど」

一拍おいて哀に目をやり、疲れたようにずるずると腰をおろした。

「人は変わってゆくものです。知って忘れて老いて、それを経ていけば過去を恥じたりするときもある。これから自分がなにを選んでいくかなんて、ね」

「好きにすればいいわ。私がなにかしていいようなことじゃない・
・見ていればいい」

「あなたがそう思うのなら、それが正解なのでしょう」

「そうかしら？」

ぼつり、と真下の家の二階の明かりが消えた。それに連鎖するよう
に遠くのマンションの窓も、あいだを縫ってゆく坂道の電灯もふ
つと姿を消した。

もう本当の夜になっていく。眠る街。少しの人間はまだ起きてい
て、この世界をひっそりと過ごし、朝を迎えるのだろう。けれどま
だ朝のことなんて考えなくてもいい、まだ始まったばかりなのだか
ら。

「正解じゃない選択などありませんよ」

「極端なこと言うのね」

「人生の生き方なんてことから見れば、の話ですが」

さあ、そろそろ何か言ってくださいよ、とキッドが半目で視線を
求めてきた。

「そうね・・空を飛ぶなんてどう」

「空を、ですか」

「ええ。一度、生身で空を泳ぐように飛んでみたいって思ってたの。こんな機会でもなきゃ叶わない願望なもの」

「お安いご用。では」

次の瞬間、ふたりは地上を離れた。

抱きかかえられふわりと屋根の上まで上昇する。その勢いで横へ滑り、街並みを過ぎていく。

空を切る音が五月蠅い。

この速さでこうなのだから、空を飛ぶキッドは地上の人々の歓声など聞こえたものではなかっただろう。

途中でぷつりと轟音は途絶え、遊覧飛行なみの浮き加減にかわる。宙で一回転し、緩く落下してみたりする。不安定さもしばらくすれば慣れた。

そっと今自分を抱いている人を見上げてみる。

月が見下ろしていた。

冷たい涙が頬を舐めた。

私は泣いているの？

問いかけてまぶたを閉じる。髪の毛が涙に濡れる。

わからないから泣いている。

人間は場合によるけれど、行動によって自分の感情を自覚することがあると実証されている。

肩が縮まり、嗚咽が漏れる。

あまりにもいろんなものが大きく過多で、重い。

でもこんな世界も確かに存在する。出会うことがある。

包んでくれる優しい微睡みに、ただ甘んじた。

「・・・高いわ」

「そりゃそうだ」

涙が落ち着いてから、声が震えていないか、言ってみた。

苦笑する。

「空でできることって案外、少ないのね」

夢見心地はつかの間。解放された心も倦んで、麻痺してくる。

「子供の頃のヒーローものなんかで憧れていたほうがよかったかも、なんてよく思いますよ」

「そりゃあ、あれだけ常日頃飛んでいればね」

「やめた理由のひとつに、飛ぶのに飽きたということもあったり」

「バカ」

「久しぶりなら、悪くはありませんね」

雲がすぐそばに。

気圧差は気にならないけれど、さすがに寒かった。

阿笠邸のベランダが揺らぎながらそこに見えていた。

そっと下ろされて足がつく。やはり安心した。夢から覚めたような喪失感が少し苦みを残していく。

キッドの白いマントが月光を吸収し、鏡のように輝いた。

最後というものが、こんなにも憂いげで満たされていることなど初めてだった。

「どうでしたか、お嬢さん」

「楽しかったわ。とても」

「それはよかった」

気障な微笑に返す言葉。

キッドが手すりに経ち、月を背にすいとお辞儀をする。右手をうやうやしく横へ流した。

何も言葉を残すことなく、水に生きる魚のように夜の空を泳ぎながら、凸凹の地平線に消えていった。

哀はそのまま振り返らなかった。

綺麗な気持ちで、生まれる柔らかい朝日を見つめる。

16 (後書き)

初めて飛行機に乗って窓から見つめた上空の世界は本当に綺麗で、あれが夜でもつと星や月が鮮明で街並みがみえるほどの位置だったらどうなんだろうか、と書いてみました。
あと一話ほどで完結すると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4069m/>

イノセンス

2011年10月16日02時00分発行